

精華町の史跡と民俗

デジタル版

精華町

序

あいさつ

精華町では、昭和五十八年度から平成十年度にかけて町史編さん事業を実施しました。

『精華町の史跡と民俗』は、『精華町史』史料篇および本文篇にさきがけて発行した参考資料版の一冊です。町民の方がたから原稿を募集し、昭和六十三年三月に初版本を刊行しました。

当時は、関西文化学術研究都市の建設・整備にともない、わが町のすがたが大きく変貌しようとしていた時期でした。こうしたなか、この地に伝わる史跡・行事・習俗などをいま一度見つめ直したうえで、新しいまちづくりを進めていこうという気運がありました。そのような熱い思いを町民の方みずから文章にまとめ

ていただき、完成したのがこの『精華町の史跡と民俗』です。

本書の初版本が刊行されてから約三十年が経ち、社会や生活のあり方はいつそう大きな変化を遂げています。本書に掲載された文章自体が、すでに貴重な証言や記録となっています。

こうした貴重な財産を広く長く活用していただくため、平成八年四月に増刷した第三版をもとにデジタル版を構成し、インターネットで公開することにいたしました。本書が地域史の理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の発刊に際し、執筆いただいた方がたはもちろん、ご協力をいただいた皆様に深く御礼を申し上げます。

平成三十一年三月

精華町長 木村 要

はじめに

精華町は、いま大きく姿を変える時期にさしかかっているが、その町史の編さんを委嘱されて以来、わたくしたちは鋭意仕事をすすめている。その間、常に町史編さんの目的を心に刻み直しているわけである。すなわち、

- 一 貴重な資料を掘り起してその散逸を防ぎ、整理保存して後世の人に伝えること。

- 二 精華町のおいたちと祖先の努力のあとを明らかにし、それが日本の歴史の流れにどのような意味を荷いどのような役割を果たしてきたかを示すこと。

である。それは、郷土愛の育成、現状の正しい認識、町民生活や行政施策、などの一助となるものになりたいと願うてのことである。

しかし、その仕事はわたくしたちだけでやるのではなく、町の住民の方がたじしんが書かれる部分もほしい、と思いつづけてきた。というのは、およそ歴史や文化は、それぞれの立場や目的によって、本質や特色はさまざまにとらえられる。それに、調査を進めれば進めるほど、住民の方でないとその存在さえ十分に知られていない資料や史跡があり、地域での生活習慣や民俗行事が今も生活のなかに祖先の創意や工夫を反映したものと息吹いていることなど、予想以上であると実感させられる。そこで、将来のためにも、それらは住民の方がたの手で記録していただき、わたくしたちと一緒そう協力しあえないものか、と考えたからである。

もちろん、原稿募集の訴えにふみ切るには、率直にいつて、若干の不安はあった。だいいち原稿が集まるかど

うか、また、内容等は、など、初めはわたくしたちにも事務局にも躊躇があった。ところが、予想に反して沢山の応募をして頂き、自分たちの住む町の歴史に関しての熱意と関心を持つ人の多さ、裾野の広さにあらためて驚かされた。原稿のうちには学術的に疑問点のあるところも無いわけではない。が、そのようなこと以上に、それぞれの原稿が或る個性をもちキラキラ輝いてわたくしたちにぶつかって来た。それこそが、この本をつくった一番の大切なことだと思う。それに、今後は忘れさられていくかもしれない史跡や伝承・生活史の諸側面も、全面的にはほぼ拾い上げて頂いた。それぞれ執筆の過程では、書くということ自分で確かめたり、また、慣れない調査に奮闘されたりしたことであろうが、頭の下がる思いである。それだけに、ここに書かれているものは総て生活に密着したものであり、これらが集まって日本の歴史は動いているのだ、という感動めいた感懐も覚えたことであった。

この本を作るに当っては初めから、応募原稿の採否や良し悪しを、審査するような姿勢ではなく、先述したような目的からもなるべく総て掲載しようという方向で進めてきた。やはりこの姿勢は間違っていないかと思ふ。お蔭で、この本は今後、町の歴史を語るとき、除くことの出来ない一冊になったと確信し、深く感謝している。終りになったが、この本の編集にあたって、地元協力委員や編さん委員の方がたに多大のご協力を頂いた。心から御礼を申し上げる次第である。

昭和六十三年三月三十一日 初版本の刊行に際して

目次

あいさつ

はじめに

石の聲

上野 英雄(北稻)

1

—精華町の道標と記念碑—

三つの伝承

石井 一夫(舟)

26

—墓地・寺・地域名について—

祝園七森

庄田りと子(西北)

36

修徳社考

松田 憲樹(菅井)

41

祝園部隊回顧

岩里 稔(北稻)

60

祝園神社由緒沿革といごもり祭

宮城 利武(西北)

69

豊凶を神矢で占う弓始式

吉川 章一(菱田)

75

新殿神社「二の会」の行事

黒寄 章次(山田)

83

杉浦三千雄(乾谷)

83

稲植神社の祭について……………松井 義雅（植田）……………94

伝承した民俗行事とその今昔……………尾崎与四男（北稻）……………101

山田川流域の消長……………嶋崎 幸次（山田）……………114

菅井住民の暮らしと水との関わり……………井上 洋（菅井）……………132

子供の頃の思い出……………西野 勇（西北）……………154

失われた農村の子供の遊び……………安宅 吉次（僧坊）……………159

野良着に魅せられて……………藤田 芳津（北稻）……………162

—民俗と衣生活—

白土採掘に生涯をかけた先人の足跡……………森田 高史（東畑）……………172

里村の古老に聞く……………吉岡 寿一（里）……………180

—大正から昭和初期における農村労働のあれこれ—

京都府相楽郡精華町『方言集』……………福味定一蒐集……………187

福味定雄編集（里）……………

編集後記